

中国語

11

1986 No. 323

ZHONGGUOHUA

編集 中国語友の会

[論壇]主題のハイアラーキー(望月圭子)／[インタビュー]
中国ワープロ事情(李約瑟・山下輝彦)／[专家漫笔] 専
門用語と訳語の問題(杉本つとむ)／[精読]〈吃了没有?〉
を読む(中野謙二)／[北京胡同だより]“扑克”(陳真)

NHKテレビ中国語講座テープ添削
出題:榎本英雄／添削:中国語編集室



大修館書店



主題のハイラーキー

《中国語》1986年11月号
大修館書店。

望月圭子

1. はじめに

近年、「原型文法」(prototype grammar)が盛んになってきたが、その基本的な考え方は次のようなものである。

ある言語現象には最も原型的な例と最も非原型的な例があり、この両者間には多くの中間的な例が連続体をなして存在する。

例を挙げれば、柴谷(1985)は「被動性」の高低を〈動作主の非焦点化の度合〉と考えている。この考えを中国語にあてはめてみると次のようになるであろう。

- ① 张三打了李四。〈張三は李四をなぐった〉
- ② 李四被张三打了。〈李四は張三になぐられた〉
- ③ 李四被打了。〈李四はなぐられた〉

①は動作主“张三”が主語という A-position にある能動文である。②③はいずれも被動文であるが、②では動作主“张三”が“被”を伴って \bar{A} -position にあり、①に比べて動作主の非焦点化が行われている。③では動作主が現われていない。よって③は②より被動性が高いと言わなければならない。なお次のような文はどう分析したらよいか、問題のある文である。

- ④ 信已经写好了。(吕[1979] p.71の例)

つまり〈動作主の非焦点化〉の最も進んだ被動文なのか、主題構造文なのか、それとも被動文でもあり主題構造文でもあるのかという問題である。

次に角田(1985)は「二項動詞」の「他動性」について、〈動作が対象に及んで変化させることを示す動詞〉が最も他動性が高く、〈能力を表わす動詞〉が最も他動性が低く、両者間に多くの中間的動詞が連続体をなして存在していると述べている。このことについて、中国語の場合を考えてみよう。

- ⑤ 张三打了李四。〈張三は李四をなぐった〉
- ⑥ 张三打伤了李四。〈張三は李四をなぐって怪我をさせた〉

“打”と“打伤”を角田の基準によって比べると、明らかに“打伤”の方が“打”より他動性が高い。次に“会、懂”等の〈能力を表わす動詞〉は、“学会了中文。”〈中

国語をマスターした〉，“看懂中文报。”〈中国語新聞が見て分かる〉のように結果補語として用いることができるが、それは“会、懂”等の他動性が低いためであると思われる。

本稿は、原型文法的手法によって中国語の主題のハイラーキーを考察するものである。

2. 中国語の主題

まず、中国語においては、どのような成分が主題性を担っているかについて考えてみる。

2.1 主題Ⅰ型

評言中のいかなる成分とも統語関係をもたない主題を「主題Ⅰ型」と呼ぶことにする。次例の下線部がその例である。

- ⑦ 象鼻子长。〈象は鼻が長い〉

- ⑧ 他工作很积极。〈彼は仕事がとても積極的だ〉

この型の主題は統語論的分析からはみ出た特殊な成分とみなされてきた。Li and Thompson (1976) が、中国語を「主題卓越言語」(topic prominent language) と呼んだのは、この型の主題の存在に注目したからである。なお、この型の主題は、wh-移動によってではなく、範疇部門において生成される。

2.2 主題Ⅱ型

主題Ⅰ型と異なり、〈評言中の動詞から格を与えられる主題〉を「主題Ⅱ型」と呼ぶことにする。次例の下線部がその例である。

- ⑨ 我看过这本书。〈私はこの本を読んだことがある〉

- ⑩ 这本书我看过。〈この本は私は読んだことがある〉

この型の主題は、主題Ⅰ型が範疇部門で生成されるのは異なり、wh-移動によって派生されると一般的に考えられている注1)。しかし Huang (1984, p.561) が指摘するように、次例は wh-移動では説明できない主題Ⅱ型をもった構造である。

- ⑪ 张三，写的书不少。〈張三₁は書いた本が少なくな

い)

次例もまた同様である。

- ⑫ 这本书, 读过的人不多。〈この本は読んだ人が多くない〉

⑪⑫の構造を分析すれば、それぞれ次のようになる。

- ⑪' [S [TOP_i 张三] [sCOMP[s [NP e_i 写的书] 不少]]]

- ⑫' [S [TOP_i 这本书] [sCOMP[s [NP 读过 e_i 的人] 不多]]]

⑪'⑫'から分かるように、主題が束縛する空範疇“e”は、関係節という構造的にかなり深い部分に埋め込まれた要素中にあるので、「下接の条件」違反となつて、wh-移動ではその派生を説明できない。従つて、このような主題は主題Ⅱ型でありながら、主題Ⅰ型と同様に範疇部門で生成されると考えられる。そこで主題Ⅱ型を下位分類し、以下、範疇部門で生成される主題Ⅱ型を「主題Ⅱ-A型」、wh-移動によって派生される主題Ⅱ型を「主題Ⅱ-B型」と呼ぶことにする。

2

2.3 場面設定語

文頭の“在”を伴った場所詞・時間詞は、「場面設定」という機能を持ち、後続の文全体をそのスコープにとりこむ状語として作用する (cf. 児玉, 1979)。こうした意味で、これらも主題性をもつと考えられる。まず以下に、范 (1982) の分類を挙げておく。

- ⑬ 在院子里我种了几棵菊花儿。〈庭には私は菊の花を何本か植えた〉(このタイプを「文頭式」と呼ぶことにする)
- ⑭ 我在院子里种了几棵菊花儿。〈私は庭に菊の花を何本か植えた〉(このタイプを「動前式」と呼ぶことにする)
- ⑮ 我种了几棵菊花儿在院子里。〈私は菊の花を何本か庭に植えてある注2)〉(このタイプを「動後式」と呼ぶことにする)

⑬⑭⑮の知的意味は同じであるが、全ての場合に、文頭式・動前式・動後式間の転換が可能ない。例えば次の例は沈星怡(1984)からのものであるが、文頭式・動前式間の転換が不可能なことを示している。

- ⑯ a. 在首都王府井大街, ……商店披着节日的盛装。
〈首都の王府井大街では、……商店が/は祝日の盛装をしている〉

- b. *商店在首都王府井大街披着节日的盛装。〈*商店は首都の王府井大街で祝日の盛装をしている〉

沈は言及していないが動後式への転換も不可能である。また注目すべきは、⑯ a の“商店”がもし主題Ⅱ-B型ならば、同一節中に主題が2つ現われ得るようにみえるが、実はそうではない。そして、場面設定語と主題Ⅱ-B型が共起する時には、場面設定語が前置されるという点にも注目する必要がある。次の⑰も沈の例である。

- ⑰ a. 在我的书架上, 新书都包了封皮。〈私の書架では、新しい本にはみなカバーがつけてある〉

- b. *新书在我的书架上都包了封皮。〈?新しい本は私の書架でみなカバーをつけてある〉

次例も沈からのものであるが、この場合には a・bとも適格であるものの知的意味が異なっている。

- ⑱ a. 在我们店里, 人人买了电视机。〈われわれの店では人々はテレビを買った〉(“我们店”がテレビを売る店でなければ“人人”は“我们店”で働いている人を指す。なお“我们店”がテレビを売る店ならば“人人”は顧客を指す)

- b. 人人在我们店里买电视机。〈人々はわれわれの店でテレビを買う〉(“人人”は顧客であり、“电视机”は必ず“我们店”のものである)

范は、文頭式は〈事柄の起きる/起きた場所を示す〉とし、動前式は〈動作が行われる/行われた場所、或いは状態の現われる/現われた場所を示す〉としている。これは要するに head を異にすることを言っているのであり、文頭式は文を head とし、動前式は動詞句或いは形容詞句を head としている。両者のこの機能の差が⑬~⑮では知的意味に影響を及ぼさないが、⑯~⑰では知的意味に影響を及ぼしているのである。即ち、⑯ a・⑰ a・⑱ a が意図している知的意味を表わす為には、文頭式以外の語順が許されないことを意味しているのである。このような場合、文頭の“在”+場所詞は範疇部門で生成され、移動規則は関与しない。以下、このような文頭式を「場面設定語-A型」と呼ぶことにする。一方、⑬のような、動前式・動後式と転換可能な文頭式は、強調・対比の色調が濃く、“我种了几棵菊花儿”という事柄が起こったのが、他でもなく“在院子里”であることを強調し、他に考えられ得る場所と対比させているかのような語感がある注3)。このような文頭式は、範疇部門では動前式の語順をとっており、話者の語用論的意図に従つて、“在”+場所詞が文頭に移動するものと思われる。以下、このような文頭式を「場面設定語-B型」と呼ぶことにする。

2.4 存現文の冒頭語

文頭に場所・時間を表わす語句が来る構造としては、場面設定語を含む構造の他に、「存現文」を挙げることができる。存現文の冒頭語と場面設定語は、共に場面設定という意味機能をもつが、前者は動詞句が後続し、後者は主述句が後続する。言い換えるならば、統語機能上、前者は主語という A-position にあるが注4)、後者は文全体をスコープとする状語という \bar{A} -position にある。加えて、前者には一般に“在”“从”等の介詞が付かないが、後者には一般に介詞が付加され、状語としての機能がよ

り明確になるという相違がある。このような統語的相違から考えると、両者は区別して考えるのが妥当であると思われる。

3. ハイアラーキー決定の基準

主題性の高低を決定する基準は、例えば[独立性](他の構成素との関係が疎であること)といった単一の素性ではあり得ず、さまざまな要素から構成される複合体であると思われる。その全体像の解明には、なお研究の余地がかなり残されているが、ここでは、現在考えられ得る基準を六つ挙げよう。

第一基準：旧情報を担う成分は主題性が高く、新情報を担う成分は主題性が低い。

第一基準設定の理由は、強調・対比のために前置される成分は、新情報でも旧情報でもよいが、原型的な主題は、旧情報であるからである。言い換えれば、主題の機能をもつ文頭の成分が、もし新情報であるならば、それは強調・対比のために前置された成分であり、原型的な主題ではない。

第二基準：主題が評言中のいかなる成分とも、統語関係がない場合には主題性が高く、反対に、ある場合には主題性が低い。

第二基準は、主題Ⅰ型が主題Ⅱ型よりも主題性が高いことを決定するものである。なぜなら、評言中のいかなる成分とも統語関係をもたない主題Ⅰ型は、主題という機能のみを担うために存在するという点で主題の独立性、ひいては鮮明度が高いからである。

第三基準：範疇部門において生成される主題構造中の主題は主題性が高く、wh-移動によって主題化された主題構造中の主題は主題性が低い。

第三基準は、主題Ⅱ-A型の方が、主題Ⅱ-B型よりも主題性が高いこと、また場面設定語-A型の方が場面設定語-B型よりも主題性が高いことを決定する。また、存現文は範疇部門においてその構造が生成されるから、場面設定語-B型よりも主題性が高いと決定できる。

第四基準：評言にとって、論理的に密接な関係にある、つまり、必要性が高い成分は、主題性が高く、そうでない成分は主題性が低い。

第四基準は、主題Ⅰ型、主題Ⅱ型が場面設定語より主題性が高いことを説明する。なぜなら、語用論的な不自然さが生じない限り^{注5)}、いかなる文の冒頭にも、場面設定語は附加可能で、評言との論理的関係は密接とはいいたいからである。

第五基準：介詞を伴わない主題は主題性が高く、伴う主題は主題性が低い。

第五基準は、存現文の冒頭語が、場面設定語より主題性

が高いことを決定する。介詞を伴わない主題は、介詞を伴うことにより統語機能がより明確化された主題よりも、文中において、主題という機能が鮮明であるといえよう^{注6)}。

第六基準：主題は、束縛する(bind)成分が音形的にゼロに近づく程主題性が高く、より多くの記号化が行われている程主題性が低い。

第六基準は、wh-移動が関与する主題構造に関して適用され、左方転位文の主題が、空範疇を含む主題構造の主題よりも、主題性が低いことを決定する。例えば、⑨の“湯先生”は、⑩の“湯先生”よりも主題性が高い。

⑨ 湯先生_i, 我认识 e_i。〈湯先生は私は知っています〉(主題Ⅱ-B型)

⑩ 湯先生_i, 我认识他_i。〈湯先生、私はあの方を知っています〉(左方転位文)

第六基準の根拠は、統語関係の明瞭度の度合によるものである。⑩中の“湯先生”は、“认识”の目的語という統語的役割を担っていることが、“他”という代名詞の存在により、より明確になっていると言えるだろう。

以上の六基準の他、格の問題も主題性に関わっていることが予測されるが、未だ不明な点が多く、将来の課題としたい。

4. 主題のハイアラーキー

3.で挙げた基準によって、主題のハイアラーキーの全体像を考えると、以下ようになる。上位のものは下位のものより主題性が高いことを示す。

- ① 主題Ⅰ型 (=最も原型的な主題)
- ② 主題Ⅱ-A型
- ③ 主題Ⅱ-B型
- ④ 存現文の冒頭語
- ⑤ 場面設定語-A型
- ⑥ 場面設定語-B型
- ⑦ 左方転位文の冒頭語
- ⑧ 強調・対比のため前置された成分 (=最も非原型的な主題)

-----<注>-----

- 1) ⑩は同一文中に主題が二つ出現するが、同一節中に主題が二つ出現する訳ではないことについては、望月(1986, p.78)参照。
- 2) この日訳でよいかどうかは検討が必要である。
- 3) 湯廷池教授のご指摘による。なお、日本語学では、「は」が主格以外の格を担う語については、対照の意が出やすいという主張もある。

- 4) 主語認定の基準については、不完全ながら、望月(1985)参照。
- 5) 例えば、
i) ??在中国, 象鼻子长。〈??中国では, 象は鼻が長い〉
ii) ??每天, 象鼻子长。〈??毎日, 象は鼻が長い〉
のような表現を必要とする場面はないであろう。
- 6) 张斌(1985)は、主語認定に際しての介詞の役割を論じている。

〈参考文献〉

- Chafe, Wallace L. 1976. "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View". in C.N.Li (ed.) Subject and Topic. 25-55. New York: Academic Press.
- 范继淹. 1982. "论介词短语 '在+处所'" 《语言研究》1982年, 第1期, 71-86.
- Givón, Talmy. 1983. "Topic Continuity in Discourse: An Introduction". in Givón, T. (ed.) Topic Continuity in Discourse. 1-41.
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson. 1980. "Transitivity in grammar and discourse". Language. 56. 251-299.
- 胡裕树. 1982. "试论汉语句首的名词性成分" 《语言教学与研究》1982年, 第4期, 13-20.
- Huang, C.-T. J. 1984. "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns". Linguistic Inquiry. 15. 531-574.
- 児玉徳美. 1979. "題目と場面設定" 《外国文学研究》46号, 43-70. 立命館大学人文科学研究所。
- Li, C.N. and S.A. Thompson. 1976. "Subject and

- Topic: A New Typology of Language". in C.N.Li (ed.) Subject and Topic. New York: Academic Press.
- 吕叔湘. 1979. 《汉语语法分析问题》, 北京, 商务印书馆。
- 望月圭子. 1985. "中国語における主語と主題" 《言語・文化研究》第3号, 51-57. 東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会。
- . 1986. "汉语的主题结构" 《中国語学》第233号, 75-84. 中国語学会。
- 沈星怡. 1984. "主谓短语前的 '在+处所'" 《语文学》1984年, 第1期, 48-50.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. "Passives and related constructions: A prototype analysis". Language. 61. 821-848.
- 湯廷池. 1985. "華語語法與功用解釋" 1985年全美華文教師協會年會發表。
- Tsao, Fengfu. 1979. A Functional Study of Topic in Chinese: The First Step Towards Discourse Analysis. Taipei: Student Book Co. Ltd.
- Tsunoda, Tasaku. 1985. "Remarks on Transitivity". Journal of Linguistic. 21. 385-396.
- 王了一. 1956. "主語的定义及其在汉语中的应用" 《语文学》1956年1月号, 21-25.
- Xu, Liejiong and D. T. Langendoen. 1985. "Topic Structures in Chinese". Language. 61. 1-27.
- Xu, Liejiong. 1986. "Free Empty Category". Linguistic Inquiry. 17. 75-93.
- 张斌. 1985. "语法答问" 《复印报刊资料: 中学语文教学》1985年, 第5期, 76-78. 中国人民大学书报资料社。

(もちづき・けいこ)

*

*

*

*

♣10月号(p. 23)〈你看懂吗?〉の訳♣

短針が通りすぎたばかりの数が何かで、何時といくらかとなりますが、そのいくらが何分にあたるかは、長針がどこまできているかをみなければなりません。

時間をはかる場合、分よりもさらに小さな単位の「秒」を使う必要があるときがあります。たとえば、100メートルを走るのにどれほどの時間を要するかという場合には、秒を使っはかります。

秒針がひとめもり動く時間が1秒です。

長針がひとめもり動くうちに、秒針はちょうどひとまわりしますが、それが60秒です。